

「ただ聖霊の働きにより」(フィリピ 1:12~30)

2019. 6. 9 川越キリスト教会・丸山 勉

【聖書】フィリピの信徒への手紙 1章 12-30節

兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい。つまり、わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他のすべての人々に知れ渡り、主に結ばれた兄弟たちの中で多くの者が、わたしの捕らわれているのを見て確信を得、恐れることなくますます勇敢に、御言葉を語るようになったのです。

キリストを宣べ伝えるのに、ねたみと争いの念にかられてする者もいれば、善意でする者もあります。一方は、わたしが福音を弁明するために捕らわれているのを知って、愛の動機からそうするのですが、他方は、自分の利益を求めて、獄中のわたしをいっそう苦しめようという不純な動機からキリストを告げ知らせしているのです。だが、それがなんであろう。口実であれ、真実であれ、とにかく、キリストが告げ知らされているのですから、わたしはそれを喜んでいきます。これからも喜びます。というのは、あなたがたの祈りと、イエス・キリストの霊の助けとによって、このことがわたしの救いになると知っているからです。そして、どんなことにも恥をかかず、これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望しています。わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。けれども、肉において生き続けられれば、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。こう確信していますから、あなたがたの信仰を深めて喜びをもたらすように、いつもあなたがた一同と共にいることになるでしょう。 そうなれば、わたしが再びあなたがたのもとに姿を見せるとき、キリスト・イエスに結ばれているというあなたがたの誇りは、わたしゆえに増し加わることになります。

ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。そうすれば、そちらに行きあなたがたに会うにしても、離れているにしても、わたしは次のことを聞けるでしょう。あなたがたは一つの霊によってしっかり立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦っており、どんなことがあっても、反対者たちに脅されてたじろぐことはないのだと。このことは、反対者たちに、彼ら自身の滅びとあなたがたの救いを示すものです。これは神によることです。つまり、あなたがたには、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです。あなたがたは、わたしの戦いをかつて見、今またそれについて聞いています。その同じ戦いをあなたがたは戦っているのです。

序. 今日「聖霊降臨日」

今日は「聖霊降臨」の主日にあたります。主イエス様が復活された日を基点にすると今日はその後7回目の日曜日、つまり50日目、イエス様が昇天されて、10日目でもあります。イエス様の弟子たちが、この日エルサレムで、イエス様の約束を信じ、一つ所に集まって祈っていたその所に、聖霊が注がれ、彼らはその霊に満たされたと使徒言行録2章に記されています。

「聖霊」というのは一体何なのでしょう？ 注意しなければいけないと思うことは、「霊」というと、何かふわふわしていると言うか、無人格の存在のように思ってしまう易いですが、

そうではありません。これは神様ご自身が私たちに送って下さった霊であり、「真理の霊」とも言われますし、「キリストの霊」とも表現されています。

そして、この霊は、何をしたかと言うと、使徒言行録を見ると分かるように、弟子たちをイエス・キリストの証人（あかしびと）として派遣しました。聖霊は、弟子たち（今日の私たちも同様）をして、「宣教せしめる」霊なのです。信徒の群れは、自己充足する群れではありません。広くキリストを宣べ伝える共同体＝つまり「教会」の出発点が、聖霊降臨日です。

1. 「わたしの身によって」

今日から、使徒パウロの手紙の一つ、「フィリピの信徒への手紙」を読むことになっています。このフィリピの信徒への手紙は、4章しかない短い手紙ですが、パウロの生きざまというものがとても伝わってくる手紙だと思います。パウロの心臓の鼓動のようなものまで聞こえてきそうです。今、パウロは、ローマでしょうか、或いはエフェソという説もあるようですが、信仰の故に囚われの身になっています。そして、その直中で、フィリピの教会の群れに向かって、彼らの信仰を励ます手紙を書いているのです。

読んで頂いた第1章12節でパウロは、「兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい。」と語っています。「私の身に起こったこと」。パウロは今、囚われの身です。彼はこの「私の身」という表現を20節でも用いています。「これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望しています。」——今、パウロは、人間の目から見たら不自由極まりない場と境遇に置かれているのですが、この「私の身」が、むしろキリストの福音を皆に知ってもらえる機会になっているし、キリストの名が崇められることになっていると言うのです。人間の常識では捉えきれない世界です。パウロにこう言わしめているものがあるのです。それこそ、「聖霊」だと思います。「聖霊」が働いている何よりの証拠なのではないでしょうか。

昨日の土曜日、体操の会に出席した時に、インストラクターの三戸さんがちょっと面白いことをおっしゃっていました。肩甲骨の動きをよくするストレッチですが、ゴムボールを脇に挟んで、腕や肩を動かす体操をしたのです。ボールを脇に挟んでいますから、動きが制限されるわけです。でもそのことで、普段あまり動かさない筋肉（インナーマッスル）を目覚めさせることになる、というのです。伸び伸びと手や腕を振る体操だけでなく、ある「制限・不自由」が与えられることによって、鍛えられる大事な筋肉がある、ということです。パウロは、不自由の中で、制限の中で、かえって、生き生きと語っているのですね。—「兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい。」

ここで知らされることは、「福音」というものは、私たちの「身をもって」証しされるものだという事です。これは驚きではないでしょうか？ 「福音」というのは、私たちがどのような環境にあっても、それを「生きる」時に前進していくものと語っていると思います。「思想」で留まるのではなく、「生きる」ということです。けれど、その福音に生きるというこ

とを、パウロは、眉間にしわをよせながら、悲壮な思いをもって神様に従って行くというのではなく、自分の今の環境というものをどこか上から眺めていると言いますか、ある意味余裕を持って従っていると思います。楽しんでいて、とさえ言ってもいいかもしれません。

この状況、これを神様は福音の前進のために用いていらっしゃるのだと。私パウロがどんな理由から囚人になっているのか、皆がその意味を探ろうとするかもしれない。また、信仰を受けた仲間が、ひるむどころか、私の様子を知って力づけられるに違いない。そのことは彼らの信仰の確信となるだろう、また、私が今外で伝道出来ないこの状況下で、私のことをあまりよく思っていない者たちが、私への嫉妬や競争心からイエス・キリストを宣べ伝えていることがあるようだ。党派心にかられ、出し抜こうという思いで熱心になっている者もいるようだが、結構なことだ。そのことでまだ福音を知らない者がイエス・キリストの言葉を聞くのだから、わたしはそれを喜ぶ、とパウロは語っています。

もし、パウロが「私のメッセージだけが素晴らしいもので、福音を伝えている」と考えていたら、こういう告白は出てこないでしょう。パウロは、ここで、ただ聖霊にすべてお委ねしているのです。それは、人知を超えた神様のなさり方の大きさ、自由さを知っているからです。その背景には、かつて逆にキリスト者たちを迫害してきた自分を、神様は捕え、今、福音の前進のために用いておられるという神様の御わざがあります。もう“自分にこだわらなくて良い”生き方、自由な生き方をパウロは与えられているのです。その意味で、パウロは謙虚です。

18～19 節。「とにかく、キリストが告げ知らされているのですから、わたしはそれを喜んでいきます。これからも喜びます。というのは、あなたがたの祈りと、イエス・キリストの霊の助けとによって、このことがわたしの救いになると知っているからです。」と。

2. 「生きるにしても死ぬにしても」

もうひとつ、「わたしの身によって」との言葉が出てくる言葉が次の 20 節です。—「これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望しています。」とあります。—「生きるにも死ぬにも」ですよ！ 私たちは「命」が一番大切だと、誰もが思います。けれどもパウロは自分の「命」さえも相対化しているのです。21 節。「わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。」と言います。ここでは「生」と「死」は対立概念ではないのです。凄いことですね。でも間違えてはなりません。彼は厭世的になって「死にたい」と言っているのではありません。「生」も「死」も、**わたしの身によってキリストが公然とあがめられるのなら、私はどちらでも良いと言っているのです。**キリストに繋がられているからこそその「自由」です！それは「死」を突き抜けた「自由」です。

「死」とは恐ろしいものです。私も死が恐くないと言ったら嘘になります。そしてキリスト教の歴史は、一面「殉教」の歴史でもありますよね。「殉教」という言葉の意味を調べると、「宗教上の信仰を貫き、そのために迫害されて死ぬこと」とありました。私は、キリスト教信

仰を与えられる前は、殉教者のことを、凄い信仰や信念の持ち主だと思っていた。しかし信じた今は、そうは思いません。私の信仰というものを「支えてくれるもの」があるのです。それが「聖霊」です。神の霊、聖霊は、「傍らにいる者」という意味もあるそうです。弱い私たちに寄り添っていて下さるお方なのです。その確かさあるので、あの詩編 23 編にもあるように「われ、死の影の谷を行く時も災いをおそれじ」と告白出来るのではないのでしょうか？

余談のようですが、強制されるような殉教は殉教ではなく、殺人だと思えます。「あなたは、人を巻き添えにして死んでゆけ。天国は約束されている」と言われ、それに従って自爆テロのように死んだ者がいたとして、それも殉教者でしょうか？ 一違うと思えます。そこには「自由」はないのです。マインド・コントロールで操作をしていると言ってもよいでしょう。

3. キリスト・イエスに結ばれているという誇り

パウロ自身は、フィリピの教会の人たちに向けて、とても正直な告白を書いています。23 節以下です。——「一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。こう確信していますから、あなたがたの信仰を深めて喜びをもたらすように、いつもあなたがた一同と共にいることになるでしょう。そうなれば、わたしが再びあなたがたのもとに姿を見せるとき、キリスト・イエスに結ばれているというあなたがたの誇りは、わたしゆえに増し加わることになります。」

パウロは今死を見据え、この世を去って、キリストに迎えられることを望む心も隠してはいません。けれども、彼は、だからこの地上はもう良いと言っているのではなく、「肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要。あなた方の信仰を深めて喜びをもたらしたい」と言っています。彼はこの獄中で、将来のことを考えているのです。もしかすると、このような逆境の身になっているからこそ、信仰が研ぎ澄まされる、ということがあるのではないのでしょうか？ 私たちも、試練の中でこそ、気付かされることってありますよね。

わたしはこのパウロの言葉でいいなあ、と思うのは、26 節の「キリスト・イエスに結ばれているというあなたがたの誇り」という言葉です。イエス様に繋がられている、ということは、誇らしいことなのだと言明します。弱々しいことでも、ましてや、惨めなことでもない。むしろ、あの十字架で流された血によって、私たちの「命」の値が、神の独り子の「命」と引き換えにされるほど貴いものであるかを知らされたものとして、この地にあつて、何も恐れず、この世や、この世の権力も恐れず、堂々と生きる。それを可能にしてくれるお方が確かにいらっしゃるということ。今、私たちは聖霊のお働きの中で、このイエス様にしっかりと結び付けられている、こんなに自由なこと、幸せなことはないとパウロは言っているのだと思います。

結. 神様のご計画の中にただ委ねて

パウロも弱い人間だったことは間違いないと思います。パウロ自らが他の手紙で自らのことを、「手紙は重々しく力強いが、実際に会ってみると弱々しい人」(コリント二 10:10)などと言われてもいると、記しているところがあります。きっとそうだったのでしょう。けれども、だからこそパウロは「キリストの」弟子なのです。彼は自分を誇ったのでも、自分を宣伝したのではありません。彼はただ、自らの「生」と「死」を貫いて、このキリストを運ぶ器になり切ったのです。

パウロはローマの信徒への手紙の中でこうも語りました。私の愛唱聖句でもあります。
「もし神が私の味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。」(ローマ 8:31)
——私たちのこの地上の「生」の一日一日も、この神様が味方となって共に歩んで下さる一日一日です。そして、「死」の時もまた、共にいて下さるという確かなお約束があります。最終的に私たちの責任を取って下さるのは神様です。「苦しみ」がない訳ではありません。様々な苦しみ、試練は避けられないものです。「何故こんなことが？」と、打ちのめされるような時が、人生、あります。けれども、パウロもそうであったように、自分の計算ではなく、そんな「私の身によって」福音が前進する、御名が崇められることにつながる、そういう出来事を神様は起して下さるのではないのでしょうか？ 今、私たちに「聖霊」が注がれているということは、その神様のプラン、或いは神様の計算の中に、私たちがこの身と心をただ委ね、明け渡していくことへと促されているのではないのでしょうか？

お祈り致します。